

修士論文（要旨）  
2012年7月

特別養護老人ホーム入所待機者家族の待機実態と課題

指導 長田久雄 教授

老年学研究科  
老年学専攻  
210J6007  
小宮 啓子

## 目次

I. はじめに	1
II. 研究の背景	1
III. 先行研究	3
IV. 目的	5
V. 意義	5
VI. 方法	5
VI. -1 調査対象と手続き	5
VI. -2 面接協力者	5
VI. -3 データ収集法	6
VII. 倫理的配慮	6
VIII. 分析方法と分析焦点者	6
VIII. -1 分析方法	7
VIII. -2 分析過程	7
IX. 結果	7
IX. -1 インタビューガイドより抽出された分析結果	7
IX. -2 分析シートから抽出された結果	11
X. 概念図	13
X. 考察	14
XI. 今後の課題	17

謝辞

文献

資料

## 1. はじめに

日本の総人口は平成 22 年 10 月 1 日現在 1 億 2806 万人、65 歳以上の高齢者は過去最高の 2,901 万人で、高齢化率は 23.1%(前年比 22.7%)となった。日本の高齢化率は急速に進んでおり 2020 年には高齢化率は 27.8%と人口の 4 人に 1 人は 65 歳以上の高齢者になり、高齢者人口は 3460 万人になると推計されている。<sup>1)</sup>

介護保険制度で要介護・要支援との認定を受けた者は平成 19 年末で、437.8 万人を超えており、そのうちの 7 割近くが在宅で生活している。

## 2. 目的

以上の先行研究から、特別養護老人ホーム待機者家族が在宅介護を継続するために、介護負担感、社会的・身体的・精神的・経済的視点から介護者が真に抱える問題を明らかにすることを目的とする。

## 3. 意義

本研究は、特別養護老人ホーム入所待機者家族の待機継続の実態を明らかにすることによって今後の待機者家族の相談支援体制の構築の一助になると考える。

## 4. 方法

### 4. -1「調査対象と手続き」

特別養護老人ホーム N 苑の、入所待機者として登録している者の家族らを対象とした。N 施設は、定員 120 名である。

### 4. -2「面接協力者」

面接協力の性別は、6 名全員女性であった。年齢は 46 歳～77 歳で、40 歳台 1 名、50 歳台 2 名、60 歳台 1 名、70 歳台 2 名であった。「要介護 2」が 1 名、「要介護 3」が 2 名、「要介護 4」が 2 名、「要介護 5」が 1 名であった。全員が転倒骨折から要介護認定され、在宅待機が始まった。

### 4. -3「データ収集方法」

面接調査に同意が得られた協力者にインタビューガイド(資料 4)を用いて、半構造化面接を実施した。

## 5. 分析方法と分析焦点者

分析焦点者は特別養護老人ホーム入所待機者を介護する主介護者である。

## 6. 分析過程

分析を進めていく中で、当初「特別養護老人ホーム入居待機者家族の待機要因」として分析を進めていた。しかし待機者 6 名の待機の実態を分析する中で待機要因ではなく、在宅介護者の待機の実態と課題を研究テーマとして調査出来ると判断して「特別養護老人ホーム入居待機者の実態と課題」とした。

## 7. 分析シートから抽出された結果

1. 【決められた一日のスケジュール】
2. 【やっぱり夫婦だなと】
3. 【毎日が変化のない介護生活】
4. 【両親とのコミュニケーションを模索する日々】
5. 【実母の介護で夫や子供とのバランスに悩む日々】
6. 【姑の夜間のトイレ介助で休む暇がない】
7. 【理由があって近隣と交流したくない】

## 8. 考察

本研究では待機実態と課題について検討した。在宅待機者は後期高齢者で、介護者の性別は全て女性であった。本研究では配偶者3名、娘2名、嫁1名であった。介護保険の在宅サービスが対応出来ない主介護者の介護負担感の要因は多様であった。

## 9. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界として協力者が6名と少ないこと、待機者、介護者の家族構成、経済状態、介護年数、対象者の居住地が江戸川区に限られていたことなどから、現実の在宅介護の実態を捉えるには限界があったと考える。理論飽和に至らなかった。

在宅介護者は介護サービスをどの様に捉えて介護をしているのかと考えたのがきっかけであった。しかし、現実には介護サービスの内容、サービスの点数も何も知らないとの答えが返ってきた。平成24年4月から介護保険制度が変わり、医療と介護の連帯（新サービスの創設）一定期巡回・随時対応型訪問介護看護サービスを打ち出しているが在宅介護を継続している方にどれだけ届くのか、サポート体制を再興して、今後このデータを基に今後の課題として介護者の待機の実態を研究していきたいと考えている。

## 文献

- 1) 内閣府, 高齢者白書, 2011
- 2) 厚生労働省, 特別養護老人ホームの入所申込者の状況, 2009
- 3) 医療経済研究機構, 特別養護老人ホームにおける入所申込の実態に関する調査研究, 社会保障審議会介護保険部会一介護給付費分科会, 2011
- 4) 高齢社会における在宅介護ネットワークシステム
- 5) 広報よこはま よこはまシニア通信, 2012
- 6) 長谷川喜代美, 石垣和子, 村松幸子, 斉藤一路女, 特別養護老人ホーム入所待機者の続柄と介護負担に関する研究, 家族看護学研究, 第 5 巻, 第 2 号, 2000 年
- 7) 石垣和子, 長谷川喜代美, 松村幸子, 斉藤一路女, 大仲敬子, 式守晴子, 特別養護老人ホーム入所申請に至る間の家族の思いとサービス利用一介護者続柄にみた特徴一, 老年看護学, 第 5 巻, 第 1 号, 2000
- 8) 横関真奈美, 近藤克則, 杉本浩章, 特別養護老人ホーム入所待機者の実態に関する調査, 社会福祉学, 第 47 巻, 第 1 号 2006
- 9) 岸田研作, 谷垣静子, 特別養護老人ホームの待機者の入所希望時期に影響する要因の分析, 厚生指標, 第 53 巻, 第 7 号 2006
- 10) 岸田研作, 谷垣静子, 特別養護老人ホームの入所の緊急性に影響する要因の分析, 第 55 巻, 日本公衆衛生誌, 第 5 号
- 11) 株式会社野村総合研究所, 平成 21 年度老人保険事業推進費等補助金 (老人保健健康増進等事業分), 特別養護老人ホームにおける入所申込者に関する研究, 一報告書一, 2010
- 12) 今福恵子, 田中早苗, 坂上朋子, 笠井倫代, 長谷川道代, 深江久代, 三輪真知子, 小川亜矢, 家族介護者の介護に対する継続意欲と関連要因の分析, 静岡県立大学短期学部, 特別研究報告者 (13・14) —19, 2003
- 13) 広瀬美千代, 岡田進一, 白澤政和, 家族介護者の介護に対する認知評価と要介護高齢者の ADL との関係: 介護に対する肯定・否定両側面からの検討  
生活科学研究誌 Vo 1. 3, 2004, <人間福祉分野>
- 14) 高原万由美, 兵藤好美, 高齢者の在宅介護者における介護継続理由と介護による学び. 岡山大学医学部保健学科紀要, 14:141~155, 2004
- 15) 広瀬美千代, 家族介護者の介護に対する肯定・否定両評価に関する文献的研究一測定尺度を構成する概念の検討と「介護評価」概念への着目, 生活科学研究誌・Vo1. 5, 2006, <人間福祉分野>
- 16) 広瀬美千代, 岡田進一, 白澤政和, 家族介護者の介護に対する認知的評価に関連する要因一介護に対する肯定・否定両側面からの検討一, 社会福祉学, 第 47 巻, 第 3 号, 2006
- 17) 北村美波, 西崎未和, 在宅介護を継続している家族介護者が介護継続意欲を持つ要因, 川崎市立看護短期大学, 2009
- 18) 杉浦圭子, 伊藤美樹子, 久津見雅美, 三上洋, 在宅継続配偶者介護者における介護経験と精神的健康状態との因果関係の性差の検討 第 57 巻、日本公衆衛生誌, 第 1 号, 2010